

大脇寺があった頃

(参考：新城市誌，八名郡誌，新城文化財案内，市教委文化課資料)

仏教が伝来したのは538年，聖武天皇の時代には東大寺の大仏，国ごとに国分寺，国分尼寺が建立され，仏教が庶民の間に広まっていきました。平安時代になると，最澄と空海によって新しい仏教がおこります。最澄は比叡山で天台宗を開き，空海（弘法大師）は高野山に金剛峯寺を創建（819年）し，真言宗を伝えました。どちらも山岳仏教の性格をもち，密教を取り入れています。密教とは，釈迦の教えを教典から学び修行して悟りを開こうとする顕教に対して，秘密の呪法の習得により悟りを開こうとするものです。天台宗，真言宗とも山中にお寺を建て，修行の場としたので，それまでの山岳信仰と結びついて，山伏の修行にみられるような修験道の源流となりました。

この真言宗が東三河にも広まった平安時代，この地方にも多くの寺院が建立されました。そのうち，鳳来寺に匹敵するような大寺院が，八名地区に何と三つもありました。それが，富賀寺，今水寺，そして大脇寺で，いずれも真言宗の寺院です。

富賀寺に残されている古文書には，次のように書かれています。

「八名井村吉祥山坊舎21か寺，庭野村紫雲山大脇寺坊中7か寺，当山坊中18か寺」（八名郡誌）

富賀寺が18の坊舎を持っていた頃が14世紀ですので，少なくともこの頃には大脇寺に7つの坊舎があり，栄えていたと思われます。吉祥山坊舎は今水寺のことで，21坊は村里にある寺を合わせた数のようですが，鳳来寺と並ぶ東三河屈指の大寺院だったことは間違いありません。今水寺の全盛期は鎌倉・室町時代だったと考えられています。その頃には，富賀寺も大脇寺も栄えていたようですので，八名地区の三つの寺院がそろって繁栄していた時代は，さぞ壮観だったものと思われます。寺院が栄えるということは，地域住民の協力も力になっていたはずで，当時の八名の人々がある程度の経済的，文化的水準にあり，強い信仰心などがあったものと考えられます。



薬師堂（市指定文化財）